14世紀前半～15世紀後半

人々に求められた銭貨－銭貨需要の増大－

14世紀になると室町幕府は、中国(明)との交易を通じて銭貨を輸入しました。一方、畿内や諸国をつなぐ都市では、地域の名産品などが盛んに取引されるようになり、「有徳人」と呼ばれる裕福な商工業者も出現しました。このような流通や商業の発展とともに、国内での銭貨の需要が増大しました。

元の滅亡
↓
明では
銭貨・紙幣が流通

中国

海禁政策

銭貨の流入は減少

銭貨需要の増大

- 手工業の発展
- 都市間での商業の発展
- 有徳人(富裕層)の出現
- 銭貨を大量備蓄

14世紀前半
後醍醐天皇、銭貨「乾坤通宝」・紙幣の発行を計画
↓
建武の新政の失敗で
計画も頓挫

日本国内でも渡来銭を
真似た銭がつくられる
(模鋳銭)

商業の発展と大金持ちの登場

14世紀(鎌倉末～南北朝期)になると、畿内と諸国をつなぐ中継都市では年貢・商品の輸送や卸売・為替業などを営む「問丸」とよばれる運送業者が現れました。彼らは各都市に集められた商品の中継や売買に従事しました。

借上から借りた銭緡を数える侍女
『山王霊験記絵巻』(和泉市久保惣記念美術館蔵)

歩くことも困難なほど太った借上
『病草紙』(福岡市美術館蔵)

中世の大金持ちの代表として高利貸業者である「借上」がいます。
室町時代になると高利貸業者は一般的に「土倉」と呼ばれるようになりました。

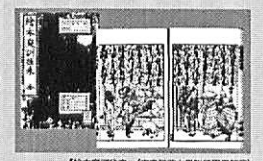
(☞詳しくはパネル「中世の金融」をご覧ください。)

中世の流通を担った人々

中世の人々の生活を記した史料(『庭訓往来』14世紀)には、

室兵庫の船頭、淀河尻の刀禰、大津坂本の馬借、鳥羽白河の車借、泊々の借上、湊々の替銭、浦々の問丸、割符を以て、之を進上し、俵載に任せて之を運送す

とあり、泊や湊や浦といわれる流通の拠点で従事していた運送業者や金融業者の様子がわかります。



『絵本庭訓往来』(東京学芸大学附属図書館蔵)

刀禰：船頭などの交通業務を担う者
馬借：馬に荷を積んで運ぶ運送業者
車借：牛に車を引かせて荷を運ぶ運送業者
替銭：遠隔地に送金する代わりに出された手形、為替
問丸：渡船、船宿や荘園年貢・商品の運送・保管・販売等に従事した業者

☞割符はパネル「中世の金融」をご覧ください。

『徒然草』にみる大金持ちの心得

『徒然草』(14世紀)第217段には大福長者の処世術が書かれています。この頃、富は徳を積むことと考えられており、お金持ちになるために五つの心得が挙げられています。

①人間世界は永久不変であることをモットーに無常を悟らない
②自分の欲求に用心し、かなえようとしてはいけない
③銭を主君や神のごとく尊びながら使用せよ
④恥ずかしい目にあっても恨まない
⑤正直を心がけ、約束を守れ

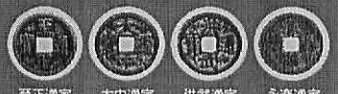
倹約に励み、銭を尊びながら生きる商人像がうかがわれます。

なぜ日本への銭貨の流入は減ったのかな？

中国での銭貨使用の再開

中国では、14世紀半ばから国内での銭貨の流通が再開され、日本への銭貨流入の減少に繋がったといわれています。

中国の銭貨(14世紀半ば～15世紀初)



至正通宝(元、元朝1350年)　大中通宝(明、明朝1361年)　洪武通宝(明、明朝1368年)　永楽通宝(明、明朝1411年)

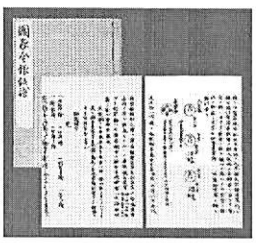
明の海禁政策

明は、宋・元の時代に活発であった海外貿易を禁止します。海外貿易は朝貢貿易に限定され、私貿易は厳しく取り締まられました。

日明貿易での銭貨のやりとり
―銭貨を中国に催促する幕府―

室町時代の外交について詳しく書かれた史料(『善隣国宝記』15世紀)には、室町幕府3代将軍足利義満や6代将軍足利義教が、明に度々銭貨を求めていたことが記されています。

1403(応永10)年、銭を積んだ中国船が相模三浦に漂着し、鎌倉公方足利満兼が対応したことが記されています。日本と中国との間で頻繁に銭貨のやりとりが行われていたことがうかがわれます。

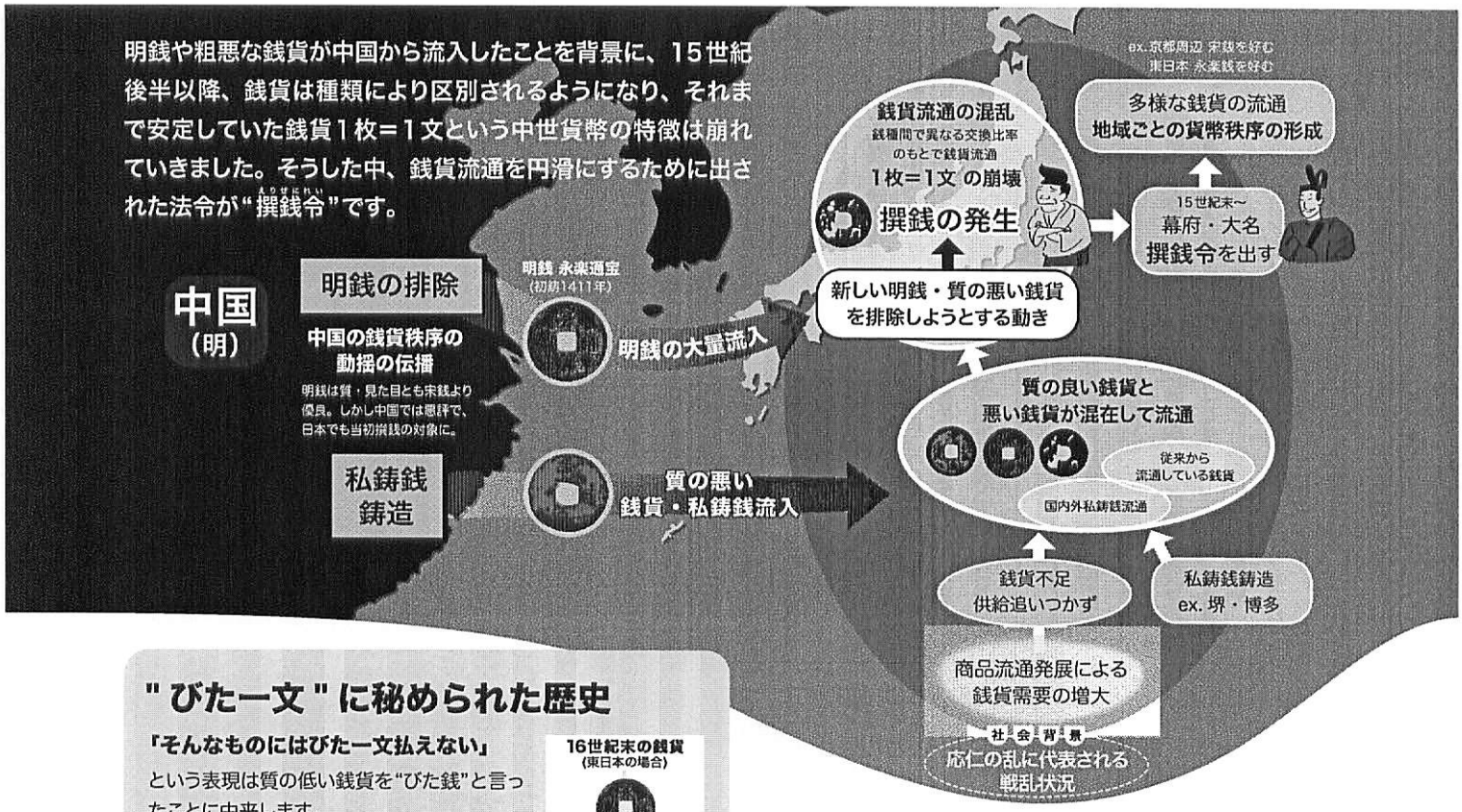


『国家金銭銭譜』(写本)

１５世紀後半～１６世紀前半

撰銭の発生 －1枚＝1文の崩壊－

明銭や粗悪な銭貨が中国から流入したことを背景に、15世紀後半以降、銭貨は種類により区別されるようになり、それまで安定していた銭貨1枚＝1文という中世貨幣の特徴は崩れていきました。そうした中、銭貨流通を円滑にするために出された法令が“撰銭令”です。



“びた一文”に秘められた歴史

「そんなものにはびた一文払えない」という表現は質の低い銭貨を“びた銭”と言ったことに由来します。

ただ、16世紀後半の史料に見られる「ヒタ（びた）」は、良質な永楽通宝よりは低品質であったものの、広く流通していた銭貨で、必ずしも質の悪いものではなかったと考えられています（精銭）。

「質の低い銭＝鐚銭」という意味で使われたのはもう少し後の時代とされています。

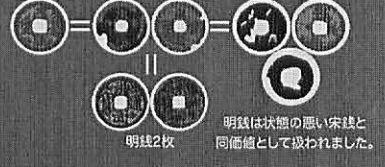
なぜ撰銭は起こったの？

中世後期、商品流通が盛んになり大量の銭貨が必要とされましたが、供給が追いつきませんでした。その状況下、国内外の私鋳銭や評判の悪い明銭が流入し、様々な銭貨が使われたことが撰銭の原因と考えられています。

明銭 洪武通宝
初鋳 1368年

中国の撰銭

中国では、15世紀中頃から撰銭が発生しました。
〈1460年代北京の銭貨の交換相場〉



中国の私鋳銭と日本への輸出

中国東南部福建・浙江では、私鋳銭が盛んに鋳造されました。
鄭舜功『日本一鑑』には、福建の龍溪地方で作られた私鋳銭を、日本が輸入していたことが記されています。
日本で「なんきん」などと呼ばれた銭が、この私鋳銭にあたると考えられています。

撰銭令

幕府や大名は、銭貨の通用基準を定めた撰銭令をたびたび出します。

幕府・大名

15世紀末～
・悪銭は受け取らなくていいよ
・でもそれ以外は銭種で区別しないで全て1枚＝1文で受け取りなさい。

織田信長

1569年
悪銭も含め銭種間で決められた交換比率の通り使いなさい。
もう1枚＝1文ではなくていいよ。
（銭不足だしね。）

16世紀後半

銭貨流通の縮小と金銀貨の登場

16世紀後半、中国からの銭貨供給が途絶し、銭貨が希少となったことなどから、1570年代の西日本では、土地などの大口の取引は、銭貨による支払い(銭遣い)から米による支払い(米遣い)に変化しました。また、各地で鉱山開発が進み、金貨・銀貨が使用されるようになりました。

銭貨の希少化

生産力の表示
銭単位：貫高制
↓
米単位：石高制

東日本：永楽通宝が精銭化・希少化

西日本：銭遣い
→1570年代米遣い
→銀遣いの登場

石見銀山・甲斐など鉱山開発と技術革新
↓
16世紀半ば～ 高額商品の取引
銀貨(西日本中心)・金貨(東日本中心)
が銭貨の代わりに使われる

甲州金

日本への
銭貨流出も停止

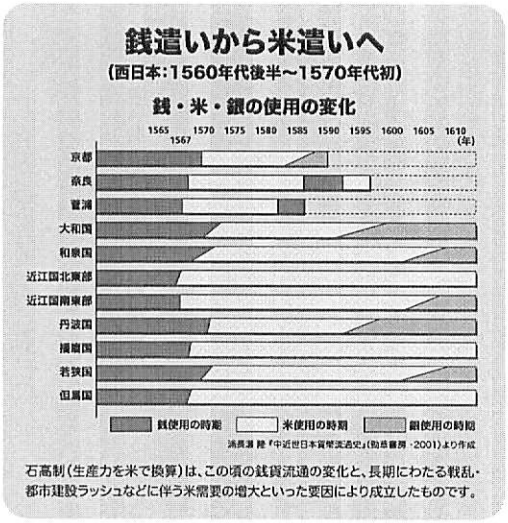
私鋳銭
鋳造停止
↑
銀が貨幣的
役割を独占

中国
(明)

16世紀前半～日本銀流出

16世紀半ば～アメリカ大陸の銀が中国へ流入

社会背景
戦国大名の分国支配



鳴見瀬 陸『中近世日本貨幣流通史』(勉誠出版・2001)より作成

石高制(生産力を米で換算)は、この頃の銭貨流通の変化と、長期にわたる戦乱・都市建設ラッシュなどに伴う米需要の増大といった要因により成立したものです。

なぜ金貨・銀貨が登場したの？

―鉱山開発と銀の輸出・金銀貨の登場―

16世紀、金銀の生産量は戦国大名による鉱山開発と技術革新により飛躍的に増大し、銀が東アジアへ輸出されました。

また国内では、16世紀後半に石州銀や甲州金に代表される領国貨幣が登場しました。それらは高額商品の取引のほか、軍事的にも盛んに利用され、社会に浸透していきました。

ティセラ/日本図(1595年)
「Hivami」(石見)付近に
「Argenti fodinæ」(銀鉱山)の記載
(鳥取県立古代出雲歴史博物館蔵)

中国へ流れ込む銀

銀の流通拡大

中国では、14世紀から米などの現物により納税されていました。
しかし、15世紀半ばになると銀の流通が盛んになり、北京の官人による銀での給与の支払い要求や江南地区の一部の徴税の銀納化がおこるなど、銀の浸透は顕著になりました。

1570年代の銀の大量流入と私鋳銭の鋳造停止

1570年代になると、南米・ポトシ銀山の増産などをきっかけとし、アメリカ大陸の銀が中国へ大量に流入しました。
私鋳銭鋳造の中心であった福建では、「銅銭を溶かして捨て、民間ではみな銀を用い、また銀秤を持つ」ようになり、中国での私鋳銭の鋳造は停止しました。
これにより、日本は銭貨の供給元を失うことになりました。

中世の金融

金属貨幣の空白期であった平安時代後期に、手形的機能を持つ文書が流通し、信用経済の萌芽がみられましたが、12世紀半ばに一旦姿を消しました。しかしその後の貨幣経済の浸透により、信用取引も大きな発達を遂げました。

中世の手形の事例 —割符（さいふ）—

割符は貨幣経済の浸透のなかで14世紀初め～16世紀初めに隔地間の送金・支払手段として機能しました。
送金手段として銭貨と比べ軽量で安全であるなどの利便性から広まった中世後期に特徴的な手形です。

割符の特徴

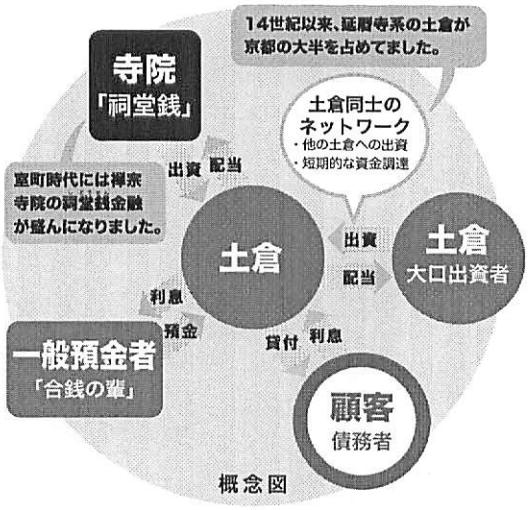
- 端数がなく10貫文のものが多い（定額化）
- 不特定多数の人々の間を転々と流通（匿名化）
- 振出人の多くは、京都や堺など畿内諸都市の有力な問屋商人層（商業手形としての性格）

中世の銀行
—金融業者 土倉（どそう）—

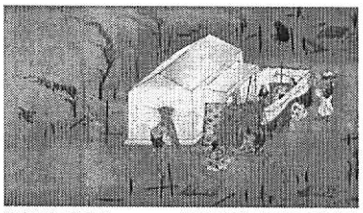
貨幣経済が浸透していく中で、土倉や酒屋など高利貸しの金融業者が大きな力を持っていきます。土倉は貸出だけでなく預金業務も行っており、「中世の銀行」ともいえる存在でした。

中世の金融と寺社

中世の金融取引で、重要な役割を果たしたのが寺社でした。
寺社領の荘園年貢の徴収を行った僧侶や神職の中から、高利貸し等を行い土倉として成長していく者が多く現れました。



概念図



火事で残った土倉　『春日権現験記絵』（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）

中世信用システムの解体

16世紀になると割符は姿を消し、その他の手形も狭い範囲での取組にとどまりました。
現物輸送の負担を軽減化，省力化するという手形の機能は金や銀に代わることになります。